

荒木直秀先生を偲んで

2017年1月8日（日）14：17、総務課長の電話から聞こえてきた荒木直秀先生の訃報は、あまりにも唐突なものでした。つい2日前、1週間後に控えたセンター試験のことについて話をしたばかりでした。

先生は、1961年1月12日、栃木県河内郡上三川町に生まれました。地元の中学校を卒業後、栃木県立宇都宮東高等学校、立教大学理学部物理学科、同大学大学院理学研究科博士前期課程へと進学されました。同課程を修了後、1988年10月、一の沢キャンパスに「大学設置準備室」が設置されるにあたり、助手として赴任されました。以来、1989年4月の開学を挟み、足掛け29年間、本学の教育、運営、その他、様々な貢献をされてきました。本学に関係のある人々のほぼ全てを見て来たと言っても過言ではないでしょう。

私が助手として赴任したのは1991年4月で、先生とのおつきあいはそこから始まりました。先生に初めてお会いしたのは4月5日の入学式の日でした。それまでに聞かされていたのは、「荒木先生はちょっと変わった人」という評価でした。どんな人かと思っていたのですが、会って言葉を交わしてみると、全く普通だというのが第一印象でした。世間から見ると物理学出身者は変人に見えるようで、先生についてもそのような評価があったようですが、私も物理学出身で、「変わり者」だらけの中にどっぷり浸かった院生生活を送っていましたから、先生は変わった内には入りませんでした。むしろ、物理現象を含め身の回りのできごとを論理的に思考するようにトレーニングを受けてきた人間としては、奇跡と言ってもよい同胞に出会えた思いだったのです。

当時、研究室と教室があったのは、体育館を除けば「教育研究棟」（現在の第1教育棟）だけで、4階5階が先生方の研究室、1～3階が教室でした。その1階の108教室（現在の1108、トレーニングルーム）が「第1パソコン室」で、PCが57台ありました。その隣の107（現在の1107）が「パソコン準備室」で、ここが我々助手の部屋でした。助手は教員ですが授業をもたせてもらえませんでした。その代わり、パソコン室の管理人の仕事が与えられていました。

パソコン準備室での勤務は、月～金曜日は9時から18時まで、土曜日は9時から15時まで（当時は土曜日にも授業がありました）で、第1パソコン室の開錠、授業以外の時間帯での見回り、プログラミングの課題（当時のコンピュータの実習はプログラミング演習のみでした）で行き詰まっている学生の相談に乗るといったものでした。1993年4月、先生と私は同時に専任講師に昇格し、その年の11月に4階の研究室に移動しましたが、第1パソコン室の管理業務は続きましたから、絶えず1階に下りて学生の面倒を見ていました。

1995年あたりまで、トータルで5年ぐらいパソコン準備室を拠点に一緒に仕事を続けていたことになります。

お互い物理学出身で、予備校や塾の講師経験者で、学生の面倒を見るのが好きだったので、とにかく話が合い、本当に楽しい時期でした。当時から、先生のところにはいろいろな学生が遊びに来ていました。優等生から遊び人まで、様々な学生が、世間話、文学や音楽や車などの趣味の話、相談事やとりとめのない話をしに出入りしていました。学生にとっては、背伸びをした話をすることもできる「話の分かる兄貴」だったのでしょう。1学年300名を超えていた時代ですが、4年間の学生生活で、荒木先生と一言も言葉を交わさずに卒業した学生はほとんどいなかったのではないのでしょうか。当時のパソコン準備室という空間は、1階のロビーと並び、学生同士、あるいは学生と教員の社交場として機能していたのです。

先生は、多趣味な方でもありました。大学時代からスキーをたしなみ、学生とスキー談議に花を咲かせていました。平成の初めの頃はスキーやスノーボードが流行っていたので、スキー場に行くための4輪駆動車が大人気でした。先生の車が四駆なのは、それが理由でした。また、大変な読書家で、その守備範囲は非常に広いものでした。他にも、西谷健次先生が赴任されたときに影響を受けて始めたビリヤードにも真剣に取り組み、かなりの腕前でした。

2000年、地域発文学部発足と短期大学部の清原への移転に伴い、研究室は、新しくできた「中央研究棟」に引っ越すことになりました。このとき、教授だけに許されていた個室が助教授以下にも与えられることになり、荒木研究室が誕生しました。1回でも訪れた人ならお分かりでしょうが、狭いながらも気さくなサロンという雰囲気の部屋でした。ここにもまた、様々な学生が遊びに来ていました。「誰でもウェルカム」というパソコン準備室とは違いましたが、それでも、私が遊びに行くと、何回かに1回は常連の学生の中にまた一人新しい学生が混じっているような感じでした。年を経るにつれ、学生にとって先生の存在は、「兄貴」から「父親」のようになっていきましたが、相変わらず先生のことを慕う学生は多かったと思います。2012年に人間文化学部に移動されてからも、さらに新たなファンを獲得していきました。

研究では、最初は物理学の分野に近い内容の論文を執筆していましたが、本学の教員との共同研究で幅を広げる一方で、「『情報』を『処理』する」ということはどういうことか」ということをテーマとして思索を深めていったようです。「コンピュータだけが情報処理ではない」「コンピュータを賢く利用するために、我々一人ひとりがきちんとした知識を獲得することが大切である」という言葉は普段の会話の端々に出てきていましたし、先生の授業を受講した学生たちもおそらく何度も耳にしていたと思います。「情報を扱うのはあくまで人間であること、その人間が自分自身を磨かなければ、情報に振り回されるだけ

の存在になる。それではいけない」というのが、先生の持っていた哲学の一つだったと思います。

突然のお別れから1年近くたった今でも、悲しみと戸惑いを拭い去ることはできませんが、先生の思いを受け継いで、作新学院大学をさらに発展させていきたいと思います。どうぞ安らかに眠りください。そして、私たちがいつまでも見守っててください。

2017年11月11日

荒木直秀教授主要履歴および業績



I. 主要履歴

1. 学歴および職歴

- 1961（昭和36）年1月12日生
- 1985（昭和60）年3月 立教大学理学部物理学科卒業
- 1988（昭和63）年3月 立教大学大学院理学研究科原子物理学専攻博士前期課程修了
- 1988（昭和63）年10月 作新学院大学経営学部助手
- 1993（平成5）年4月 作新学院大学経営学部経営学科専任講師
- 2004（平成16）年4月 作新学院大学経営学部経営学科助教授
作新学院大学経営学部広報委員長
- 2006（平成18）年4月 作新学院大学経営学部入試委員長／経営学研究科前期主任
- 2007（平成19）年4月 作新学院大学経営学部経営学科准教授
- 2011（平成23）年4月 作新学院大学入試・広報部長
- 2012（平成24）年4月 作新学院大学人間文化学部人間文化学科准教授
- 2013（平成25）年4月 作新学院大学人間文化学部人間文化学科教授
- 2014（平成26）年4月 作新学院大学入試部長

2. 学会および社会における活動

平成12年10月～ 情報処理学会員

平成14年5月～ IJIE (International Journal of Industrial Engineering) 会員

II. 主要業績

著 書 『アドヴァンスト 国語表現法』(共著) おうふう 2000(平成12)年
『経営学』(共著) 白桃書房 2003(平成15)年
『新版 アドヴァンスト 国語表現法』(共著) おうふう 2011(平成23)年

論 文 「作新学院大学経営学部における情報処理教育の概要について」(単著)『情報処理教育研究集』 1989(平成元)年
「破壊と浸透」(共著)『作新学院大学紀要』 1991(平成3)年
「『知識工学演習』における受講生の脳特性と学習理解度」(共著)『作新学院大学紀要』 1991(平成3)年
「学習者の思考タイプに応じたプログラミング教育に関する一考察」(共著)『作新学院大学紀要』 1991(平成3)年
「物理学に於ける認識」(単著)『作新学院大学紀要』 1991(平成3)年
「『情報』と『処理』についての研究ノート」(単著)『作新学院大学紀要』 1999(平成11)年
「高等学校情報教育実態調査報告」(共著)『作新学院大学紀要』 2000(平成12)年
「高等学校情報教育実態調査報告2000」(共著)『作新学院大学紀要』 2001(平成13)年
「Categorization of EAHS Papers to Integrate Methods in Designing Information Systems — from the Physics Point of View.」(共著)『Proceeding for the Conference of IJIE 2002』 2002(平成14)年
「『情報』と『処理』についての研究ノートⅡ」(単著)『作新学院大学紀要』 2003(平成15)年